

## 第222回 令和8年5月1日(金)

### 「監督について」

3月のWBCはベスト8で終わってしまいました。すごい選手を集めても、ホームランやパワーで勝負しようとしたらアメリカや中南米にはまだ敵わないということがわかりました。日本が得意なスモールベースボールで戦えば勝機はあったのかもしれませんが、めざましい戦績をあげている選手を使わずに、井端監督の現役時代のような器用で小粒な選手を使ったとしたらどうだったでしょうか。万が一負けた時のハレーションはかなり大きくなってしまおうでしょう。監督の苦悩がわかるような気がします。

監督時代の落合さんみたいに世間で何を言われようが自分流を通せる人ならできるかもしれませんが、人気選手を呼ばなければスポンサーにも良い顔をされないでしょう。あの打順が井端さんの本当にやりたかった野球とは違うような気がしてなりません。

あそこで誰を使えばよかったなどの結果論は誰でもいうことができます。実際失敗しているわけですから、どのピッチャーであってもホームラン打たれるよりは良いだろうということになりますし、そこにもっともらしい理由をつければ評論家のできあがりです。

判断を求められる人間は結果論で批判されることに反論はできません。

試合が終わると「勝ったのは選手のおかげ、負けたのは監督の責任」とよく言います。打たれたのは選手なので批判が選手に行きがちですが、基本使うのは監督であり責めを負うのは監督の責任です。「選手は悪くない。使ったのは監督だから」という姿勢は崩すべきではありません。

それでも経緯や努力の過程を知らない第三者が結果を見て責めるのは違うような気がします。ファンというのはそういうものだと言えばそこまでですが、スポーツにはどうしても読み切れない運のようなものが絶対にあります。絶対的なエースでも打たれることがあるし、「あいつで負けたら仕方ない」と思う選手であってもケガやチーム事情で使えないこともあるかもしれません。

監督家業は孤独です。勝って褒めてくれる人は一握りです。負けて批判する人は大勢います。強くなればなるほど勝って当たり前になり、この傾向は強まります。地区大会で優勝したときに祝福されたチームも、何回か優勝すると県で上位に行けないことを批判されます。上に行けば行くほど強い相手に勝たなければならない宿命と、下から上がってくる挑戦者に負けてはいけないプレッシャーが積みあがっていきます。

監督にとって、勝って歓喜の輪をつくる選手の姿だけが救いになります。私は喜ぶ選手を見ながら「うれしい」気持ちよりも「安堵感」のほうがずっと大きかった覚えがあります。少なくとも今日1日だけは勝つプレッシャーから解放される。また明日から次の相手への不安が自分を動かす原動力となります。